OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代日本におけるゲイの親密性の探求 : 性的／非性的な関係の二分法を超えて
Author(s)	冨安, 皓行
Citation	共生学ジャーナル. 2019, 3, p. 26-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72883
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文

現代日本におけるゲイの親密性の探求
―性的／非性的な関係の二分法を超えて―

冨安 皓行*

The Research of Intimacies Between Modern Japanese Gays
Beyond Sexual/ Non-Sexual Relations

Hiroyuki TOMIYASU

論文要旨

既存のゲイやレズビアンたちの結ぶ関係における親密性の研究には、性的／非性的な関係という異性愛中心的な二分法が存在した。そこで本研究では、ゲイと自認する私によるインタビューとフィールドワークに基づくオートエスノグラフィックな記述から、日常におけるゲイ同士の二者関係における親密性を分析し、性的／非性的の二分法に基づく関係を超えた親密性を模索した。その結果ゲイたちは、性的／非性的な関係という二分法のはざまで、お互いへの配慮と不断の努力によって関係を維持していた。また関係を通じてゲイという生き方を探求し、若い世代のゲイへその生き方を伝えていた。ゲイたちの生き方に着目することで既存の規範を問い直し、その規範に囚われない新しい生き方を探求する点に、ゲイを対象とする研究の学術的意義があると提起した。

キーワード　ゲイ、親密性、生の様式、オートエスノグラフィー

Abstract

The purpose of this thesis was clearing the intimacy between gays in daily life through auto-ethnographic description and analysis. Through this research, I explored the intimacy beyond heteronormative sexual/non-sexual relationship. In the result, it was cleared that gays are making relations between sexual desire and non-sexual relational directivity with considering and endeavor for each other for continuing the relations. Furthermore, gays are inventing, exploring and handing down the way of lives as gays through the relations. I suggested that living with making unstable relations is one form of lives as gays, and indicated academic possibility in finding new intimacies and lifestyles through the study about gays.

Keywords: gay, intimacies, lives as gays, autoethnography

*大阪大学大学院　人間科学研究科　多文化共生学　博士後期課程；hiroyuki.tomiyasu@gmail.com

1. ゲイたちの結ぶ関係における親密性をめぐって

1.1　学術的背景の問題と目的

近年日本においても欧米と同様に、ゲイやレズビアンの解放をめざす運動や性的マイノリティの社会的包摂を求める運動が、さまざまな団体や組織によって展開されている。その結果日本でもゲイという存在は、社会的に認知され受容され始めている。またインターネット上の SNS の普及などもあり、ゲイ男性たちが互いに交流するための手段も発達してきている。

長らくゲイはインターネットなどの媒体において、もっぱら「性的」な存在として表象されてきた。すなわちゲイは性的指向、性的欲望や性的な行為などによって特徴づけられる存在であった。そのためゲイ・スタディーズやクィア・スタディーズにおけるゲイの親密性をめぐる議論においても、長らくゲイたちの性的な欲望や性的な行為により構築・持続する親密性に着目した研究が行われてきた。

イギリスの社会学者ギデンズ（1999）は、現代における男女の親密性についての議論の中で、ゲイの性的な行為に基づく関係に言及している。ギデンズによれば、近代の男女の関係性は恋愛や家族生活を支えてきた慣習や制度と一体となってきたが、現代になるにつれ個人と個人の情緒的な絆を重視するものへと変化しているという。ギデンズはこの関係性を「純粋な関係性」と名付けている。ギデンズは「純粋な関係性」をすでに実践してきた者としてゲイを挙げている。それはゲイたちが異性愛中心主義の社会において、もともと家族などの慣習や制度から周縁化されていたからであった。ギデンズは「純粋な関係性」の実践の一つとして、ゲイたちのバスハウス[(1)]での一夜限りの性的な関係を挙げる。バスハウスにおいてゲイたちは、身分や階級などが取り払われた裸一つの姿で相手を誘惑し合い、性行為を行う。その関係は一晩限りの持続しない関係であることも多く不安定な性質を持つという。ギデンズは現代の男女の関係の行方を考えるための一助として、ゲイたちの構築する関係に着目したといえるだろう。

ギデンズのほかにゲイたちの性的な行為や実践について分析した研究者として、アメリカのクィア研究者ベルサーニ（2012）がいる。ベルサーニは、アダム・フィリップスとの共著『親密性』の「恥を知れ」という章の中で、

ゲイたちの性的な行為に着目しその行為により構築される親密性について言及している。ベルサーニが着目した性的な行為はゲイたちによる「乱交」である。その中でもベルサーニは「ギフトギバーズ」（HIV ウイルスに感染しており、HIV ウイルスを積極的に相手へと感染させようとする者）と、「バグチェイサーズ」（HIV ウイルスに自ら感染しようとする者）との「ベアバッキング」（コンドームを用いない性行為）に着目した。

バグチェイサーズは乱交において、HIV ウイルスを含む可能性を持つ精液や乱交のために準備された不特定多数の精液を、自ら肛門に受け入れるという。ベルサーニはこの行為自体について批判するが、同時にその行為における「純粋な愛」という神学の概念との接点と、その行為に見られる「非人称的な親密性」について語る。「ベアバッキング」は「主体が見知らぬ他性に貫かれ、さらには乗っ取られることさえも許容する修練である」点で儀礼的であり、「ベアバッキングのネコ（筆者注：この場合、肛門に性器を受け入れる者を意味する）は、彼の身体に精液を注入したすべての人々のみならず、未知のパートナー全員と、おそらくすでに死んでいて肉体的に接触できないパートナーと、非人称的な親密性をつくりあげてしまう」という（ベルサーニ 2012:96）。

ベルサーニの提示は非常にラディカルなものである。近代においてアイデンティティや「個人」という概念は、人間の実存の中心に位置してきた。ベルサーニはゲイの性的な行為に見られる親密性を探求する中で、「個人」同士の二者関係を超えたゲイ・アイデンティティを持ったゲイたち全体の親密性を模索しているのである。

以上のようにギデンズやベルサーニは、ゲイの性的なことがら（性的な行為そのものや、性的な欲望）に着目し、そこに新しい親密性の在り方を見いだした。ゲイという概念がセクシュアリティに基づいている以上、我々はゲイを対象とした研究において彼らの性的な欲望についても向き合わざるを得ないだろう。

しかしゲイたちの構築・維持する親密性を考える際、性的なことがらをできるだけ分析の対象から排除しようとした研究もある。それは社会的に付与されていたゲイに対する性的なイメージを塗り替えるための試みであった。

たとえば社会学者のウェストン（1997）はアメリカで行ったフィールドワ

ークに基づいて、ゲイやレズビアンたちの親密な関係について記述・分析している。ウェストンはアメリカの伝統的な家族観、すなわち「異性愛者」を前提とし「生物学的」な「血」を重視する家族観に対して、その家族観と異なる関係を作ろうと模索するゲイたちの姿を描いた。ウェストンは、ゲイやレズビアンたちの築く関係を「選択する家族（families we choose、chosen family、families we create）」と名付けた。

たとえばアメリカにおいて、人々はクリスマスなどの休暇を一般的に「家族」と共に過ごす。しかしゲイやレズビアンたちは親の否定的な態度を恐れ、実家に帰省することを躊躇うという。その代替として、気の置けないゲイやレズビアンの友人たちとその休暇を過ごすという。その関係は生物学的な繋がりに基づかないものの、「家族」的な特徴を帯びているという。この「選択する家族」はパートナーのみならず、友人など第三者をも含んで展開される関係でもある。

また新宿二丁目という空間と「ゲイメンズバー」における民族誌を書いた日本の人類学者の砂川（2015）は、「ゲイメンズバー」における相互扶助的で共同的な関係性を明らかにしている。その一例として、客が店側のマスターやスタッフに対してお酒を奢ることによって店の売り上げに貢献する姿を挙げている。また店側のマスターやスタッフはお金を持っていない客に対して無料のお茶を出すことで、できるだけ出費を抑えさせるよう配慮することもあるという。

さらに砂川は、新宿二丁目という空間における「アクター」達の多層性も指摘する。新宿二丁目という空間における「アクター」はゲイのみだと考えられがちである。しかし実際に新宿二丁目は、地主やそこに住んでいるゲイではない住民、商売を行う者、日常的に新宿二丁目に訪れるゲイや観光として訪れるゲイでない人々など多種多様な「アクター」により成り立つ空間であると述べた。

より最近の研究として、日本のゲイカップルへのインタビューに基づき、ゲイカップルのあいだの親密性を明らかにした家族社会学者の神谷（2017）の研究がある。調査協力者のゲイカップルは、神谷の興味・関心となる家事や仕事、収入などの質問に対して様々な回答を行っている。神谷はその回答を基に、ゲイカップルのあいだの家事や余暇活動の共同による実践を通した平等な関係を明らかにした。神谷はこの平等な関係を「分かち合う親密性」

と名付けた。神谷は「分かち合う親密性」を同性カップルのみに見られる現象だと定義してはいないものの、この関係性に異性愛規範や性別役割分業について再考する可能性を見出している。

ウェストン、砂川、神谷らの研究は、先述のベルサーニやギデンズの研究と異なり、ゲイやレズビアンたちの性的なことがらについてあまり言及しない[(2)]。ゲイやレズビアン同士の友人関係や新宿二丁目という空間における人間関係、ゲイカップルにおける関係など一見性的なことがらと切り離せない研究対象であるにもかかわらず、そこで発見されたのは疑似家族的な関係や、関係における共同性・互助性、平等なパートナーシップなど性的なことがらと関連しないような親密性である。

ゲイやレズビアンの親密性に着目する研究の概観から浮かび上がってくるのは、もっぱら研究対象における性的なやり取りに着目するものと、非性的な関係に着目するものがあることである。つまりゲイやレズビアンの親密性における研究は、性に関することがらへの過度な着目と過度な排除、性的/非性的な関係という二分法を、暗黙のうちに前提としているように思われるのである。そしてこの二分法に潜む問題点は次の二点である。

第一にその性的/非性的という二分法自体が、異性愛中心社会の規範に基づいている点である。この二分法について指摘した研究は限られているが、その一つとしてセジウィック（2001）による文学研究が挙げられる。セジウィックは近代の文学で表象される男性の親密な関係に着目し、そこに性的な関係（「ホモセクシュアル」）と非性的な関係（「ホモソーシャル」）という二分法があることを指摘している。男たちはホモソーシャルな関係において非常に強力な「友情」を築くが、その際関係を形作る相手への性的（「ホモセクシュアル」）な欲望を徹底的に排除する。近代において性的な関係と非性的な関係は分断され性的/非性的な関係という二分法が成立し、それが今の異性愛中心的な規範を形作っている[(3)]。しかしゲイたちの構築・維持する関係は、これら異性愛中心的な性的/非性的という二分法で分断できはしないだろう。

第二に性的/非性的な関係の二分法を設定することによって、研究のフィールドがある程度設定されてしまうという問題点である。性的な関係に着目するならば、どうしても研究のフィールドは、既存の研究のように性的な空間など特定の場を設定せざるを得なくなってしまう。しかし実態として

ゲイたちは日常生活におけるさまざまな場所で他のゲイたちと出会い交流を行っている。ゲイたちが日常空間においてどのような関係を築いているか、ということが問題なのである。

こうして性的/非性的な関係の二分法から批判的な距離をとりながら、ゲイの人びとが日常生活のなかで築き上げる親密な関係の特徴を明らかにするという観点から、本稿では次の問いを探求する。日常生活におけるゲイ同士の二者関係の親密性はいかなる様式を持つのか。その親密性には性的/非性的という区分が存在するのか。その親密な関係は、人が自らをゲイとして自覚しゲイとして生きる過程においてどのような意味を持つのか。これらの問いを探求することで、日常におけるゲイ同士の二者関係における親密性を明らかにし、性的/非性的という二分法を超えた親密性の可能性を模索したい。

1.2 研究方法としてのオートエスノグラフィー

私は 2016 年 9 月から 2017 年 12 月までの期間において 5 名の調査協力者にインタビューとフィールドワークを行った。

インタビューではまず回答を促進させるねらいのもと調査協力者の幼少期の経験について質問し、次第に幼少期から現在にかけての調査協力者の恋愛経験や現在の人間関係について話を聞いた。インタビューにおいては調査協力者の返答に対して適宜質問を挟むようにし、時として私自身の恋愛経験や人間関係について調査協力者に開示することもあった。インタビューはできる限り IC レコーダーを用い録音し、録音不可能な場面ではインタビュー終了後、記憶が鮮明なうちにメモや文章に残すようにした。電話を用いたインタビューを行うこともあった。

フィールドワークでは、調査協力者と一緒に食事を取ることや調査協力者の通っている職場や大学を訪問するなかで、普段の生活の様子を観察しフィールドノートに記録した。メモや文章に残す際にはその時私が感じたことや考えたことについてもできるだけ書き込むようにした。インタビューやフィールドワークで録音した音声については、調査協力者の言葉遣いを尊重しできるだけそのままにして文字おこしを行った。

調査をおこなうにあたって本稿における手法を、ゲイと自認する私による他のゲイへのインタビューと参与観察に基づくオートエスノグラフィー

的記述の分析とした。以下でその手法を採用した理由について簡潔に述べる。

オートエスノグラフィーは文化的経験を理解するために自らの経験を記述・分析する方法である（Ellis 2004；Ellis et al. 2011）。オートエスノグラフィーによって自らの経験を記述し内省的に分析することで、私たちは「社会」や「文化」をよりよく理解することができるという。自らの経験を分析対象とする研究はジェンダー研究などの分野で盛んになされてきた。また人類学においても、観察者と被観察者という二分法の再考に基づいたネイティブ人類学の登場については周知のことだろう。

現代のゲイを研究対象とする研究においても、自らの経験を描くといういわゆる「当事者研究」は少なからず存在する。こうしたいわゆる「当事者研究」はしばしば、オートエスノグラフィーと呼びうる要素を備えている。先述したウェストン（1997）や砂川（2015）の研究もその性質を持っている。自らの移住体験とアジア系のゲイとして生きる経験を想起的に描き、ゲイというカテゴリーの中における多様性を提示した研究なども存在する（Eguchi 2011）。

しかし本稿がオートエスノグラフィーの手法を採用するのは、私自身がゲイであることによってもっとも身近な研究対象となるから、という理由だけではない。本論におけるテーマであるゲイの間の親密性が、半ば必然的に自らの経験を含むエスノグラフィックな記述を要請する、という事情もある。ゲイの間の親密性を研究のテーマとするかぎり、ゲイと自認する調査者と調査協力者との関係自体が研究の対象となり、そうならざるを得ないとも言える。調査者が調査対象者とのあいだで一定の親密な関係を築いているからこそ、調査協力者は親密でない他者にたいして語らない親密性についても語るとも考えられる。親密な関係は研究の主題であると同時に調査の方法でもあり、調査者と調査対象者との関係もまた自己反省的記述の対象となる、あるいはそうならざるをえない。以上が本研究においてオートエスノグラフィー的な手法を採用する理由である。

オートエスノグラフィーの手法を用いて、次章ではインタビューとフィールドワークにおいて特に性的な欲望について語ったシュンさん、マコトさん、ユウジさん（それぞれ仮名とする）の３名と私のやり取りを提示し、ゲイたちが日常空間においてどのような関係を構築し実践しているかを明

らかにする。つづく第 3 章では、これらの 3 名の調査協力者と私のやり取りをもとに、ゲイ同士、ゲイと異性愛男性、ゲイと異性愛女性にみられる親密性について分析を行う。そしてゲイを対象とする研究を行うことの学術的な意義についても論究していきたい。

2. 日常におけるゲイの結ぶ親密な関係

2.1 ケース 1　―シュンさんと私の「微妙」な関係―

シュンさんは 2019 年 1 月現在 30 代前半の男性で、関西地方のとある中核的都市で一人暮らしをしている。シュンさんと私は 2013 年にインターネットのチャット掲示板を通じて知り合った。シュンさんがチャットで関西弁を使用しており居住地を尋ねたところ、共に関西地域に住んでいることが分かりその後もやり取りを続けるようになった。私とシュンさんは京都で初めての「リアル」(4) を行った。それから電話やメールを用いて二カ月に一回ほどの頻度で連絡を取り合っている。

シュンさんは私のインタビューの要請に快諾し「通ってる大学を案内してや」と言った。私はシュンさんと大阪大学の近くの駅で待ち合わせ、その後近隣の公園と大阪大学を案内しながらインタビューを行った。

以下シュンさんの友人関係の構築・維持の方法について、異性愛男性／異性愛女性との友人関係の実践と私との友人関係の実践の順にみていこう。なお以降、本論の事例の提示の中で理解しづらい言葉や表現については、〔〕を用いて私の説明を加えることにする。

（a）シュンさんの友人関係の作り方

私は大学の自習スペースでシュンさんの子ども時代から現在までの友人関係について尋ねた。シュンさんは自身の交友関係について思い起こし、男の子の友人の少なさについて語った。私も子ども時代を思い起こすと、やはり男の友人より女の友人の方が多かったことに気が付いた。私は聞いた。「じゃあ、今まで女の子の友だちのほうが多かったですか」。シュンさんは答えた。「女子の方が多い。話合わんのよね、男と。下手なんちゃう〔同意を求めるように語尾を上げて〕、男の友情築くのが。俺らは色目で見がちや

ん。だから違う」。

一方でシュンさんは男性に比べると女性とのほうが親密な関係を築きやすいとも語った。その関係の構築と維持について互いの性的な経験を共有することが意味を持つと語った。

> 俺、女の友だちには普通に聞けんねんな、どんなエッチしとん〔質問をするように語尾を上げて〕みたいな。で教えてくれる子は教えてくれるから。「そうなんや、フェラしつこく頼まれるんやな」みたいな、「しんどいな」みたいな。どっちかというと女目線でそんなん聞きたいって感じかなあ。うまくこう言葉のあれを使うなら、女目線で「ああそうなんやね」って。この子は一体どんなエッチしよんかなっていうのを聞いて。で、別に欲情もせえへんやん〔語尾を上げて同意を求めるように〕。で「ノンケ」(5) の男の子に対して、「どんなエッチするん」とかは全く興味ないから聞くことはないよな。

この語りから、シュンさんが「ノンケ」の男性との友人関係の構築を困難と感じていることが分かる。一方で「ノンケ」の女性とは類似した性的な経験について話すことによって親密な関係を構築していることが分かる。

シュンさんが「ノンケ」の男性との付き合いを苦手とするのは、やりとりの際、相手に対する性的な欲望を持たないように意識するからである。シュンさんはおそらく相手に対して、自らがゲイだと気づかれないように努めているのだろう。そして異性愛者の男性同士のような友人関係を築こうと試みる。しかしその試みにおける特別な意識が、男性との会話に困難を生じさせ、関係の構築に失敗するのだと考えられる。

他方でシュンさんの「ノンケ」の女性と親密な関係を築きやすいと感じる一つの理由は、性に関することがらについて率直に語りあいやすいからである。「ノンケ」の女性と性的行為について語り合うとき、シュンさんは自らを「女性」の側に位置づけ「ノンケ」の女性に共感するのである。

（b）性的な欲望を持ちながら続ける友人関係

上記はシュンさんと「ノンケ」の男性／「ノンケ」の女性との関係の構築について物語っている。ではシュンさんはゲイの男性とどのような関係を

築いているのだろうか。そのためにシュンさんと私のやり取りに注目したい。

私はシュンさんの友人関係について聞いた後、インタビューの「雰囲気」を変えるため休憩を取ることを提案した。シュンさんはインタビュー最中における私の提案に驚いていた様子であったが了承した。私とシュンさんは喫煙可能な大学敷地外へと向かった。私は歩きながらシュンさんに「友だちと言って思い浮かぶ人はどのくらいいますか」と聞いた。シュンさんは「女性が二人、男性が一人」と答えた。私はその一人の男性について説明を促した。「そいつは結構なくそ野郎やからな。まあまあぼんくらやからな。まあ頭がいいんやろうなってことは思うねんけど、抜けてんねんどっか。ことインタビューに対しては」。そう言い私をにやついた顔で見つめてきた。私はシュンさんが私のことを話しているのだとようやく理解した。

私は質問した。「その人に対して恋愛感情はありますか」。シュンさんは「全然違う、お互い遠慮なく言えるやろ」と答えた。私は言った。「でも、幸せになってほしいな、とは思う」。シュンさんは煙草をふかしながら言った。「それは俺も思う。でも先に幸せになったら思う。てめえ裏切ったなみたいな、ふざけんなよって」。

私はお互いの幸せを願いあう行為を恥ずかしく思った。私はその恥ずかしさを打ち消すため、シュンさんに大阪大学キャンパス内の案内をかってでた。私とシュンさんは一緒に体育館へ向かった。この体育館に行くという行為には一つの目的があった。それは体育館にいる格好良い男性を探すことであった。シュンさんは格好良い男性を探すことを「国税調査をする」「隠密起動」と喩え、私たちを「国税調査員、マルサの女や」と喩えて鼻歌を歌い体育館へ入った。

シュンさんと私は、体育館の二階にある応援席でスマートフォンのアプリケーション(6)を開いた。たくさんの男性の顔写真が画面に現れた。シュンさんは私に一人の写真を見せて言った。「俺は、マスクしてるから隠れてるけどこういうのが好き。マスクありやからやで。183cm、75kg、23 歳。ベスト〔語尾を強調させるように〕」。シュンさんのスマートフォンには上半身裸でマスク姿の男性の写真が映っていた。その男性は確かに筋肉質で引き締まった体型をしていた。シュンさんは私の好きな「タイプ」を聞いてきた。私は登録者の写真の中から一人を選び、その写真をシュンさんに見せた。私

とシュンさんはその後 15 分ほどお互いの「タイプ」について語り合い体育館に居る男性についても一通り話した後、体育館を離れた。

私は後日フィールドノートを読み直した。そのとき私とシュンさんによる体育館におけるスマートフォンのアプリケーションを開き、性的欲望の対象としての第三者について語り合うという行為は、互いが相手の性的対象であることを意識するのをさけ、互いを「友人」として認め合うことを促進する役割を持つのではないかと考えた。そこで私は後日電話にてシュンさんに意見を聞くことにした。

シュンさんはそのことについて聞いた私に対して次のように語った。「悪く言えばお互い深入りをせんみたいな感じちゃう〔語尾を上げて笑いながら〕。よく言えばお互いなんとなく気ぃ遣っとうから、ぐっと距離感詰めることもないけど、お互い離れることもない。お互いなんとなくおるみたいな感じ」。私はそれを聞いて「なんかそれを考えると、僕とシュンさんの友だち関係っていうのは、割とほんとにプラトニックな関係なんですね」と聞いた。シュンさんは答えた。

> ええやん。100 になるだけ近づけるみたいなの、俺好きやで。あのゴールになるだけ近づけるみたいな。世の中に絶対はないけど理想に近づけるみたいな。

シュンさんはさらに続けた。「タイプの人とは親友になれん。いや、だってヒロくん〔私〕のタイプが俺やったとするやん。ちょっと見栄はるやろ〔同意を求めるように語尾をあげて〕」。私もそれに同意した。シュンさんは次のように言った。

> でもふとした瞬間はそりゃかわいらしいなっていうのは抱くよね。俺もヒロくんに「この子ええな」って思う瞬間は、過去にゼロやったかって言われるとそうじゃないもんね。

「僕もシュンさんに対してゼロじゃなかったかっていうと、二桁はいってないですけど、片手の指で数えられるくらいはありますよ」と私が答えると、

シュンさんは次のように返答した。「そんな感じそんな感じ。やからふっとした瞬間に思うだけ。以上。それがずっと心の中に引っかかってるみたいなわけでもないみたいな」。

このやり取りからシュンさんが私と理想の友人関係を維持するため、さまざまな方法を通して私との「距離」を調節していることがわかるだろう。調節の一つの方法がことばを用いることである。シュンさんは一方で私を「友だち」として挙げ私に対する性的な欲望の所存もほのめかすが、他方で私を「ぼんくら」と表現し、性的な欲望についての話題になった際に違う話題にそらそうとしている。このように言葉を用いることによって相手との「距離」を調節するのである。もう一つの方法がスマートフォンのアプリケーションを用いることである。アプリケーションを通してお互いの「タイプ」の男性を伝え合うということによって、関係を親密にしていると同時に、お互いが性的な欲望の対象となるかも推し量っていると考えられる。

つまりシュンさんと私の関係は、性的な欲望を持ちながらも性的な行為に及ばないというお互いへの配慮の中で維持されているといえるだろう。性的な欲望を持ちながら維持する友人関係の様式は、ゲイたちにとって当たり前なのだろうか。次のマコトさんのケースからも考えていく。

2.2 ケース２　―マコトさんの献身―

マコトさんは九州地方のとある中核市に住む 40 歳の男性である。マコトさんと私は 2015 年、スマートフォンのアプリケーションを通して知り合った。私は初めてマコトさんと「リアル」した際、大柄な体と強い九州訛りのマコトさんに対し萎縮しながら接した。しかし次第に私はマコトさんの「繊細さ」を知ることとなった。マコトさんは過去に仕事上のトラブルで「うつ状態」に陥ったことがあったという。さらに当時床に臥せがちだった私の身を案じ相談に乗った。現在私たちが「リアルする」際はたいてい昼食と温泉での入浴を共にする。

マコトさんは私のインタビューの申し出に対して、電話越しで「俺が力になれるなら」と言い承諾した。インタビュー当日いつものようにマコトさんは自宅近くの建物まで私を迎えに来た。私が助手席に乗り込むと、マコトさんはいつものように温泉で有名な地域へと車を走らせた。

以下マコトさんのゲイとの関係の構築の方法について、自身をゲイと自

認するようになるプロセス、ゲイの友人に対する性的な欲望に基づく献身の順にみていく。

（a）自身をゲイと認識するまでのプロセス

私は車内でマコトさんの幼少時代の出来事や、少年・青年時代における出来事について聞いていた。するとマコトさんは自らの性的な欲望を感じた経験として、小学校 5 年生の時の出来事について語った。「5 年生くらいになると、体育の時間に〔友人たちが〕こうなんか半ズボンとか履いてるとキュンと思ったりした」。そしてマコトさんはあるエピソードについて語りだした。

マコトさんは公立の高校に入学し、高校の寮に入寮した。マコトさんは寮で様々な地域から集まってきた同級生と仲良くなったという。しかしマコトさんはそこでの寮生活を「寂しいんだよね。一人親元から離れて」とも振り返った。そこでマコトさんは、夜に友人たちと同じ布団で寝るという行為を日常的に行ったという。そして「で、くっちゃべり〔話し〕ながら寝るんだけど、それじゃすまないのよ」と言い、同級生と性的な行為をしばしば行ったことを述べた。特にマコトさんは「今でいうかっこかわいい」一人の同級生と繰り返し性的な行為を行い、帰省の際には同級生を実家に引き連れ、実家でも「イチャイチャした」のだと語った。

その後その同級生は東京の大学に合格したという。マコトさんも東京の大学に合格し、共に上京する予定だった。しかしマコトさんは、急性腎不全を患い実家で静養することとなった。進学後実家へ帰省した同級生がマコトさんと再会した際こう言った。「なんで東京に上がってこないの〔語尾を上げて、尋ねるように〕。二丁目〔新宿二丁目〕とか楽しくてしょうがないよ」。マコトさんはこの言葉に驚いたという。なぜならマコトさんは自身のことを新宿に行くような存在、つまりゲイだと思っていなかったのだと語った。マコトさんは二丁目について熱く語る同級生に対して、「君はそっちでどうこうするんだったら、俺はこっち〔マコトさんの居住する地域〕で活動してみるよ」と伝えたのだという。

マコトさんの話はその後も続いた。マコトさんはその同級生に毎月ゲイ雑誌を送ってもらうように頼んだという。そしてマコトさんは 21 歳の時、初めて地元でゲイバー「デビュー」[(7)] した。その時のことをこう振り返った。

最初は何も分からず緊張するわけだがね。髭を生やしたマスターがいて「怖え」とか思いながら「初めて来ました」とか言ったら、ハナエ（仮名）さんっていったんだけど、今も元気してると思うんだけどね。その人に色々とそこで情報を貰う訳でしょ。「こういう子がいるよ」とか。だから今の飲み屋と違って、今の飲み屋は完全に酒好きが行ってただ探すっていうことだったけど、当時は出会いの場っていうのがホントになくて、そこで知り合うっていうのがすべてだったわけよ。

マコトさんの語りのなかで興味深いのは、マコトさんが同性と性行為を行っていながらも、自身をゲイと位置づけていなかったことである。自身をゲイと自認するきっかけは、友人による「二丁目」についての語りであった。その後マコトさんはゲイバーに行き他のゲイと交流する中で、自らをゲイと位置付けるようになっていったのである。このやり取りから、同性に対して性的な欲望を持つこととゲイと自認することが、必ずしも一致しないことが分かる。

ではマコトさんは自らをゲイと認識するようになった現在、他のゲイたちとどのような関係を構築・維持しているのだろうか。そしてそこには性的／非性的という二分法が存在するのだろうか。次の例を見ていく。

（b）マコトさんの献身

マコトさんと私は山の中腹にある温泉で共に入浴した。マコトさんは最近の仕事の忙しさや最近亡くなった知人について私に物語った。私とマコトさんは温泉から出た後、マコトさんの車の中で話をし始めた。

私はマコトさんの友人関係について質問した。するとマコトさんは、シンゴ（仮名）さんという一人のゲイの「友だち」について語り始めた。シンゴさんは現在 35 歳で、マコトさんとシンゴさんはもう 14、15 年ほどの付き合いになるという。シンゴさんは元々マコトさんの知人 A の「彼氏」だった。

マコトさんのシンゴさんに対する初対面の印象は最悪だったと語った。しかしマコトさんはこうも語った。「でもそいつはそいつで可愛かったわけ

よ。目がパッチリして。今はもう気持ち悪いくらいなんだけど」。マコトさんとシンゴさん、そして知人 A は、三人でよく一緒に行動するようになったという。

しかししばらくして知人 A は仕事の都合で東京に行くことになり、シンゴさんとのパートナー関係を解消したいと思うようになった。二人の関係に「引導を渡した〔交際関係の終わりをシンゴさんに告げた〕」のがマコトさんだった。マコトさんはその話をシンゴさんに伝えた際、新幹線に乗ってシンゴさんの家まで行きシンゴさんを慰めたのだと語った。「すごかったんだよ、雷がガンガン落ちる日でさ。わんわん泣くでしょ。よかった雷が鳴ってて。泣け泣けって言って。泣いてスッキリしたか〔優しくなだめるような言葉遣いで〕って言って」。

シンゴさんは知人 A を追いかけるため上京を考えた。しかしマコトさんはそれを制止し、シンゴさんに教員として就職することを勧めたという。シンゴさんは現在マコトさんの勧めにより地元で教員をしている。しかし現在シンゴさんは仕事で様々な問題を抱えており、仕事を辞めることも視野に入れているという。マコトさんはその大変な姿を「見ていられない」と語った。そしていざというときは転職先を紹介するつもりだと語った。

> 惚れた弱みだよね。でもね。根底にはね、いまだにあると思うよ。まあないと思うよ、ヤルこちゃ〔性的な行為を行うことは〕、まずないと思うんだけど。ある前提で考えたときには、俺の中の不純な部分が盛り上がるからね。不純の上の清純さが成り立つっていう真逆のようなことをしてるけど、不純を隠すために清純さをよそおうとかさ。俺、何もしないよ、何もしないよ、ガブって噛むっていう。でもみんなそうだと思うけど。

マコトさんはシンゴさんに対して性的な欲望を秘めていた。その性的な欲望によりマコトさんのシンゴさんに対する行為は、シンゴさんの失恋時に新幹線でシンゴさんの家に行き、慰めに行くほどの献身的なものとなっている。ここで注目すべきは、マコトさんの「不純の上の清純さが成り立つっていう真逆のようなこと」という語りである。マコトさんにとって他のゲイと結ぶ関係は「不純」であることが前提であり、相手に性的な欲望を抱くこ

とは当たり前である。そしてその「不純」さを覆い隠す努力によって（それがどれだけ成功しているかは別として）、関係を維持しようとしている。マコトさんはゲイと「友人としての関係」を築く際、相手に対して性的な欲望を切り離すことはできない。献身的関係は相手に対する性的な欲望により持続するのである。

私はインタビュー終了後のある日文字おこしを行っていた。私はふとマコトさんによる私に対する性的な欲望についても思いを巡らせた。私はそのときインタビュー中の印象的なやり取りについて思い出した。私はインタビューの途中で、車から流れる音楽に興味を持った。女性ボーカルがセンチメンタルな調べとともに優しく歌っていた。私はマコトさんに聞いた。「この曲、誰の曲なんですか」。マコトさんはその曲を歌っている歌手の名前を答え、好きなアニメの主題歌だと私に紹介した。マコトさんはそのアニメの主人公について語った。「細身でどこか影のあるような主人公がね、俺は好きなのよね」。マコトさんの語った「細身でどこか影のあるような主人公」のイメージは、当時の私のイメージと類似しているように感じた。それならばマコトさんが私と会うたび温泉に行っていたのも、私の裸体を見るという目的があったのではないかと思った。しかし私はインタビューに快諾し、様々な語りをしてくれたマコトさんに対してそのことを考えるべきではないと思い、考えることをやめた。

マコトさんは他のゲイとの交友関係において、相手に対して常態的に性的な欲望を持つという。そのため、私に対しても性的な欲望が向けられている可能性を持つ。しかし私はそのことをできるだけ無視し、関係の維持を試みている。なぜならばマコトさんにとって、私が性的な欲望の対象であると認めてしまえば、私とマコトさんとの既存の関係が変容してしまうと考えたからである。つまり私自身も性的／非性的な関係という二分法を前提とする規範を少なからず内在化していたことが分かる。マコトさんと私のあいだの関係は、相手に対する性的な欲望と献身、そしてその欲望についてできるだけ無視するという努力のもと維持されていると推測できる。

シュンさん・マコトさんという二つのケースは、ゲイの「友人」に対して性的な欲望を持ちながら維持する関係について物語る。しかし次に紹介するユウジさんのケースでは、相手に対する性的な欲望よりも、その関係によって創造されるもの・伝えらえるものについて詳しく物語っている。ゲイ同

士の二者関係のその関係を結ぶ両者にとっての意味について、次のユウジさんのケースから考えていこう。

2.3 ケース３　―ユウジさんの「愛」―

ユウジさんは 50 代前半の男性であり東京都内で一人暮らしをしている。ユウジさんと私は 2012 年に SNS を通じて知り合った。二人のやり取りは私の日記に対するユウジさんのコメントから始まった。ユウジさんと私の「リアル」は 2013 年の冬の東京にてであった。初めて会ったユウジさんは私が想像していたより年上に見えた。私の所感は当たっていた。ユウジさんは SNS に登録していた年齢（30 代前半とプロフィールには書かれていた）より 10 歳、年齢をごまかしていたのだった。ユウジさんと私ははじめての「リアル」でお互いの趣味や恋愛に関する話などを語り合った。その後ユウジさんと私は一カ月に一回のペースで電話をし、一年に一回のペースで直接会っている。

私はユウジさんに対してフォーマルなインタビューを行わなかった。しかし許可を取りながら、日常の電話での会話や直接会った際の出来事についてノートに記録するようにした。

以下私とユウジさんの飲食店でのやりとりと私のサンフランシスコ渡航におけるユウジさんと私のやりとりから、この両者の関係における親密性とその親密性から創造されるもの・伝えられるものについて考えていこう。

（a）「魂の子ども」を残す

ユウジさんと私はある夜電話していた。私はユウジさんに対して自身の研究の進捗状況を説明した。私は他の調査協力者の「出会い」についての語りを簡潔に伝えた。するとユウジさんは自身の若かりし頃の「出会い」について語った。ユウジさんはゲイ雑誌の文通欄と呼ばれるツールを用いてゲイの友人を探したという。ユウジさんは文通欄で知り合った男性にテレホンカードを送った。そして自宅に電話をかけてもらったのだと語った。

> 仲良くなった人とのやり取りなんて、テレホンカードを送ったりして。そうやって必死に仲間を探していたんだ。友人と手紙のやりとりをしていて、友人か

らの封筒に「プライベート」なんて書いてあって、それを見た両親に「何それ」って不審に思われたりもしたさ。

ユウジさんは昔を懐かしむように私に語った。けれど同時に私はユウジさんの口調と声が大きくなったのを感じた。私はユウジさんの私に対する相反する二つの感情を考えた。一つはインターネットの普及により他のゲイとの交流が容易となった私たちの世代に対する嫉妬である。もう一つは、その時代を生きてきたユウジさん自身に対しての誇りである。ユウジさんはこの両極的な感情の中で、私に当時の「出会い」の難しさを語ったのだと理解した。ではこの話を私に対して語る意味はなんだろうか。

私はユウジさんの私に対する行為の意味をある居酒屋の出来事を通して「理解」したように感じた。私は京都の居酒屋でユウジさんに対してこれからの人生について相談をしていた。ユウジさんはその話を聞きアドバイスを行った。一方ユウジさんは私に対して、ユウジさんの甥の話とユウジさんと仲の良いゲイの友人の話をした。ユウジさんはビールを飲みほし、熱燗を飲みほし、追加でヒレ酒を注文した。次第にユウジさんの声が大きくなった。ユウジさんはこう語った。

僕たちは同性愛者だから、結婚をしないわけじゃない〔同意を求めるように語尾をあげて〕。だから僕達は生涯子どもを持たない。時々それがすごく悔しくて、他の人の子どもの話とかを聞くとぶっ飛ばしたくなるんだけれど。でも同性愛者でも子どもを残すことができるような気がする。それは魂の子どもみたいなもの。自分の考えというか思想みたいなものを、次の同性愛者の人に繋いでいく。こうしていけば、僕たちは遺伝子的な子どもは持てないかもしれないけれど、精神的な子どもを作ることができると思う。それは「ノンケ」の家族より、もしかしたらずっとすごいことかもしれない。

ユウジさんは私に対してこの話を酔っぱらっている際に何度かしたことがあった。そのため私は「また始まった、いつもの酔っ払いだ」と思いながら聞いた。食事を終えるとユウジさんは私の分まで食事代を支払い、こう言っ

た。「今回はおごるから、あなたが、お金を稼ぐようになったら若い子におごりなさい。そしてそういう若い彼氏が見つかるといいね」。

ユウジさんは生物学的な子孫を残せないことを悔恨していた。しかしユウジさんは、自分の考えや思いを若い世代のゲイに伝えることを通して、自らの擬似的な「子ども」を残すことを志向していた。ユウジさんはおそらく自身の思想を伝承する相手の一人として、年少者で同じくゲイと自認する私を選んだのだろう。「あなたがお金を稼ぐようになったら若い子におごりなさい。そしてそういう若い彼氏が見つかるといいね」ということばから、ユウジさんが将来の私に別の年下の男性とこのようなやり取りを行うことを期待していることが分かる。

しかしユウジさんが、その発言によって私と性的な関係や「恋愛的」な関係にならないよう関係を調節している可能性についても指摘しておきたい。ユウジさんは相手に対する性的な欲望について、シュンさんやマコトさんのように直接言及しない。しかしユウジさんは私に対して、現在仲の良い男性について語り、将来の私の「彼氏」について語ることによって、私と性的な関係や「恋愛的」な関係になることを避けようとしているとも考えられる。

この「魂の子ども」を繋いでいくことを志向するユウジさんは、私に対してどのような行為を行うのだろうか。次の例を見ていこう。

（b）疑似的なオヤと「愛」

2017 年 1 月、私は短期調査のためサンフランシスコに渡航する予定だった。しかし私は、サンフランシスコへの渡航日前日に体調を崩した。医者が私に対してウイルス性の腸炎に感染している可能性をほのめかした。そのため私はサンフランシスコへの渡航を中止しようとした。その日の夜私はユウジさんに電話し状況を説明した。ユウジさんは電話越しで笑いながら語った。「きっとそれは緊張しているんだよ。僕だってそりゃ講演の前の日は緊張してお腹痛くなるもん。最初はそんなもんだよ。とりあえず行っといで。ただし機内食は食べないこと、コッテリしてるからね」。私はサンフランシスコ行きを制止しないユウジさんに落胆し、電話を切った。

翌日私が乗り換えのため羽田空港に到着すると、出口でユウジさんが待っていた。ユウジさんが来てくれたことは嬉しかったものの乗り換えの時間が十分になかったため、私とユウジさんはすぐさま国際線に向かうバス

に乗り込んだ。

ユウジさんはバスの中でオレンジ色の B5 ノートほどの大きさのメッシュのポーチを私に渡し、つぎのように言った。「ホッカイロと腹巻が入ってるから使って。機内に乗り込む前にトイレででも腹巻をつけること。お腹を温めるとお腹の痛みは和らぐから」。私がメッシュのポーチを開けると、ポーチの中から腹巻が出てきた。腹巻は病院で支給される膝サポーターのような薄いベージュの色をしていた。腹巻にはポケットがついておりそこに小さなホッカイロを収納できるようになっていた。

ユウジさんは続けて言った。「あと家を整理していたら、じいちゃんがアメリカに行った時の硬貨がたくさんあったんだよね。せっかくだからひろゆきくん〔私〕に使ってほしくて。全部種類ごとに分けたから、使って」。私は透明のビニール袋に入った硬貨を見た。1 セントから 1 ドル硬貨まですべて小分けのビニール袋に入れられ、「1 セント×24＝24 セント」とコインの枚数と合計金額の書かれた小さなメモ紙も入っていた。私は几帳面なユウジさんらしいと思った。

バスが国際線ターミナルに到着するとき、私はそのポーチをデイパックに入れた。ポーチを入れたデイパックの重さは重かった。私は「1 セント硬貨をこんなに渡されても使いどころがないだろうに」と思った。私は「行ってきます」とユウジさんに言い、手荷物検査場のゲートへと向かった。

ユウジさんは私の体調を気遣いカイロを渡し、さらに祖父が遺した硬貨を贈与している。ユウジさんは私との関係において、年長者として自らの生き方を伝え、献身的な行為を施すことを重視する。私はときにユウジさんに対して罪悪感を覚えることがあった。なぜならば、ユウジさんによる私への献身的な行為に対して返礼していないと感じたからであった。そのため私を性的な欲望の対象と見てもらった方がまだ気が楽だと思うこともあった。このことは私自身が他のゲイと結ぶ関係において、性的なやり取りを相手の行為に対する返礼の一つとして考えていることが分かる。

以上のやり取りから二点について指摘できるだろう。一点目としてユウジさんは、相手に対する性的な欲望についてことばとして表現しないものの私とのあいだで性的な行為を行わないように関係を調整している。二点目としてその複雑な関係でのやり取りを通して、ゲイとしてどのように生きていけばよいのかという生き方の技法がユウジさんから私に対して伝え

られていることである。これまでのシュンさん、マコトさん、ユウジさんのケースから次章にてゲイ同士の二者関係について考察する。

３．ゲイの結ぶ関係における親密性と親密性の探究の意義

3.1 ゲイ同士の二者関係・ゲイと異性愛男性／異性愛女性の二者関係

本章では前章までのオートエスノグラフィー的記述からゲイ同士の二者関係における親密性について分析していく。その分析を行うためにセジウィック（2001）による男性同士の非性的な関係（「ホモソーシャルな関係」）の分析と、砂川（2015）のゲイ同士の関係の分析について言及しておきたい。

セジウィックは 18 世紀中旬から 19 世紀中旬までのイギリス文学における男性同士の強い結びつきの表象について分析し、男性同士の親密な非性的な関係（「ホモソーシャル」な関係）が、男性同士の性的な欲望の排除と、女性という第三項を共有することで成り立つことを主張している（セジウィック 2001）。セジウィックの特色はある関係を分析する際、関係を親密にすることや維持するための第三項としての媒体に着目した点であろう[8]。

セジウィックの主張をもとにゲイ同士の関係を分析したのが砂川（2015）である。砂川はゲイ同士に見られる関係を親密なものとするための第三項として性的なやりとりを挙げている。その一例として「ゲイメンズバー」でしばしば観察される性的な悪ふざけ（相手に性器を見せるように促すような行動）を挙げている。ゲイたちは普段プライベートなことがらとされている性的なことがらを語り合うことや、性的な悪ふざけを行うことによって、親密な関係を構築しているというのである。

砂川は、ゲイにとって性的な欲望の対象が男性であることにも着目した。砂川はゲイ同士の構築する関係において、直接的な性的な欲望の対象と、関係を強固にするために語られる性的な欲望の対象が共に「記号的には同性」であることを指摘し、そのことがゲイ同士の関係の複雑さを生んでいると述べている。砂川の分析は試論にとどまっているものの、ゲイ同士の親密性に関心を寄せる本稿にとって示唆に富むといえるだろう。

この砂川の視点に基づき今回観察されたゲイ同士の二者関係について考えると、砂川の指摘のように、ゲイ同士の二者関係において性的なことがら

を語り合うことが相手との親密度を高める効果を持つことが分かる。たとえばシュンさんと私のあいだでのスマートフォンのアプリケーションを利用したお互いの「タイプ」を見せ合う行為がそれである。お互いの性的な欲望に基づく「タイプ」を見せ性的な好みを知らせあうことによって、両者の親密度が高まっている。

しかし注意しておかなければならないことは、砂川も指摘するようにゲイたちにとって性的な欲望の対象が「男性」だということである。そのためゲイ同士の二者関係では、マコトさんのケースのように相手に対して初めから性的な欲望を抱いていることもあり、初めから性的な欲望を抱いていなくても親密度が高まるにつれて相手に対して性的な欲望を感じるようになることも考えられる。その中で異性愛的な規範を少なからず内在化しているゲイは、その「友人関係」において相手と性的な欲望を排除し、非性的な関係を結ぼうとする。ゲイ同士の二者関係では、相手に対する性的な欲望と性的な関係と非性的な関係という二分法のはざまで、複雑な関係が展開されることとなる。

その複雑な関係を維持するために必要となるのが、相手に対する配慮と不断の努力である。その例としてシュンさんのことばによる私との「距離」の調節や、マコトさんの献身的な態度が挙げられるだろう。ことばによって一方で相手に対する好意を伝え、もう一方で相手と性的な関係になるのを避ける。献身的な行為によって、相手に自らの性的な欲望をカモフラージュさせながら、相手との親密な関係をとだえさせないようにする。これらの両義的ともいえるコミュニケーションの様式は、相手との関係を続けるための配慮であり、努力によるものである。

ここまでゲイ同士の二者関係における親密性を分析したが、ゲイと異性愛男性、ゲイと異性愛女性という二者関係における親密性についても性的な欲望という視点から分析したい。もちろん今回の分析はシュンさんの語りという限られた事例にのみ基づくものであり、すべてのゲイと異性愛男性、ゲイと異性愛女性の関係に適応できるわけではないことをあらかじめ述べておく。するとこの二つの関係においても性的な欲望が、関係の構築と維持に影響を与えていることが分かる。

ゲイと異性愛男性の二者関係の場合、異性愛男性が求めるのは非性的な関係（「ホモソーシャル」な関係）である。そして性的な欲望という観点か

ら考えるならば、その関係を持続させる媒体は、「女性」への性的な欲望と同性への性的な欲望の忌避であろう。しかしゲイは「女性」への性的な欲望を異性愛男性と共有することができず、同性への性的な欲望を隠す必要に迫られる。つまり性的な欲望に関するコードが両者の間で共有されていないため、両者の関係の構築は失敗することが多いのだと考えられる。

ゲイと異性愛女性の二者関係の場合、両者は男性への性的な欲望というコードを共有している。そのため親密な関係を結べることがあるといえるだろう。しかしながら異性愛女性は、異性愛男性にとって性的な欲望の対象となり、性的に親密な関係を結ぶことができる点で異なる。そのためゲイと異性愛女性との関係は性的な欲望について共有するという点では共鳴できるものの両者が全く同じであるとも言えず、関係は複雑なものとなるだろう。

つまりゲイ同士の二者関係、ゲイと異性愛男性の二者関係、ゲイと異性愛女性の二者関係というどの関係においても、性的な欲望に着目するならば、その親密性は非常に複雑で不安定な様式をとることになる。近年多くの研究者たちはゲイたちの「生きづらさ」について語り、その要因をゲイというカテゴリーに対する差別や偏見に求めがちである。しかしながら、もし「生きづらさ」ということをいうのであれば、本稿で述べてきたようなゲイのあいだの不安定な関係や、ゲイと異性愛男性/異性愛女性との関係の複雑性にこそその要因を求めることができるのではないだろうか。いずれにしても、性的な欲望と他者への配慮という重なり合いの中で、ゲイ同士の親密な関係を結ぶ（結ばざるを得ない）という点に、ゲイ同士の関係の複雑さがあるのではないだろうか。

3.2 新しい生き方の探求

前節において、ゲイ同士の二者関係の複雑で不安定な性格と、その関係の維持のための相手への配慮や不断の努力について述べた。またゲイと異性愛男性／異性愛女性の二者関係における親密性の複雑性についても述べた。ゲイの他者と結ぶ二者関係においてその不安定な性格が生み出される背景には、関係を性的／非性的なものに分断する権力がある。そうした権力、すなわち異性愛規範は当然問い直されなければならない。

しかし私は同時に、ゲイとして生きる者たちの結ぶ（結ばざるをえない）

複雑な関係がもたらす新たな可能性にも着目したい。それはすなわち、ゲイたちが性的／非性的という二分法にとらわれない新たな関係を開くという可能性である。

この観点は20世紀を代表する歴史学者・哲学者であるミシェル・フーコーによっても示唆されている。ミシェル・フーコーは「生の様式としての友愛について」というインタビューにおいて、ゲイを対象とした研究の可能性がゲイとはいかなる人々かと同定することにではなく、新しい生の様式、すなわち生き様、生き方を模索することにあると指摘している。

> もう一つ警戒しなければならないことは、同性愛という問題を「わたしは何者なのか。私の欲望の秘密は何なのか」という問題にひきもどす傾向です。もしかすると、「どのような関係が、同性愛を通じて成立し、発明され、増殖され、調整されうるのか」と問いかけた方がよいのではないでしょうか。問題とすべきなのは、自分の性の真理を即自的に発見することではなく、むしろ多数的な関係に達するために、これから自分の性現象を用いることなのです。そして、おそらくこれこそが、同性愛は欲望の一形態ではなく望むべきことがらであるということの真の理由なのでしょう（フーコー 2001a:372）。

またフーコーは、「性的快楽の社会的勝利―ミシェル・フーコーとの会話」という対談において次のように語っている。

> したがって必要なのは、同性愛者的な生活スタイル、同性との性的関係が重要となるような存在様式の選択を可能にするために闘うことなのです。同性とのセックスの可能性を、より一般的な生活様式の内側で、その様式の一要素あるいは補足事項として許容するだけでは十分ではありません。同性とセックスするということは、まったく当然ながら、一連の選択、現実的にはまだ可能とされていない一連の異なる価値や選択を伴いうるものなのです。問題は、同性とセックスするというささやかな淫行を既成の文化領域に組み込むことだけではありません。新たな文化形態を創造することなのです（フーコー 2001b:118-119）。

この引用からフーコーのゲイ研究に対する目的と可能性を「新たな文化形態を創造する」ことに見出していることが分かる。わたしたちはゲイを研究対象とすることによって「新たな文化形態を創造する」、つまり新たな生き方を見出す可能性について考えるべきなのである。

この新たな生き方を生きることの一つとして、性的／非性的を超えた関係を模索しながら築くことがあげられるだろう。その関係を築くことは、規範に当てはまらない生き方を共に模索し、その生き方を伝承することでもある。マコトさんは私に対して献身的にふるまい、ユウジさんは私に対してオヤのように振る舞っている。もちろんゲイ同士の二者関係においては、性的な欲望を切り離すことはできないため、これらの献身的な行為を相手への性的な欲望を背景化する為と位置付けることもできる。しかしこの行為によって、ゲイとしてどのように生きるべきか、すなわちゲイとしての生き方が発見され伝えられているという可能性を強調したい。ユウジさんやマコトさんはインタビューにおいて自らの経験について語ることを通して、ゲイとして生きてきた自らの歴史とゲイという生き方を私とこの論文の読者に伝えようとしたのだろう。

この親密性を持った関係こそ、フーコーの述べた「多数的な」関係やベルサーニの「個人」と「個人」を超えた新たな関係といえるのではないだろうか。ゲイたちは性とは不可分なゲイという生き方を、親密な関係を通して共に探求している、ということもできるだろう。その生き方を明らかにすることは、ゲイとして生きるものたちに意味があるだけでなく、私たちの社会規範を対象化し、それを超えた生き方を模索する上で一つの示唆を与えうるのではないだろうか。これがゲイを対象とする研究の意義だと考えらえる。

4. 結語

これまでのゲイ・スタディーズやクィア・スタディーズによるゲイやレズビアンたちの関係における親密性の研究には、性的／非性的な関係という異性愛規範的な二分法が存在した。

そこで本稿では、インタビューとフィールドワークを研究手法として、自らをゲイであると自認する私によるオートエスノグラフィックな記述から、

ゲイ同士の二者関係とゲイと異性愛男性、ゲイと異性愛女性の親密性を明らかにした。

そこで観察された関係は、性的／非性的の関係という二分法のはざまのなかで、お互いに対する配慮と関係を維持するための不断の努力の中で構築・維持されていた。また関係の実践によってゲイという生き方が探求され、伝えられていた。

ゲイたちは、性的／非性的という二分法を前提とする異性愛規範に囚われない関係を探求しているとも言えるだろう。この親密性を含むゲイの生き方に着目することで異性愛規範やさまざまな規範を対象化すること、その規範を越えた生き方を模索することに、ゲイを対象とする研究の意味があると考えられる。

本稿の限界と今後の課題として二点を提示したい。本稿の限界として、この親密性が、はたしてゲイ同士の二者関係にのみ見られるのかどうかについて充分な検討ができなかった点がある。すなわちこれらの親密性は、異性愛者にも見られるのではないかという指摘があるだろう。本稿はゲイ同士の二者関係に焦点をあてたため、本稿において見出した親密性が異性愛者の間にも見られるのかという点については、その端緒が見えてきたというだけで充分に検討できなかった。しかし本稿はゲイの親密性を明らかにすることによって、異性愛者の親密性を対象化する思索的な試みであり、今後異性愛者の構築する関係についても再考の機会を促す可能性を持つだろう。

もう一点として「個人」と「個人」を越えた親密性について充分に議論できなかった点がある。この「個人」と「個人」を越えた親密性について、すでにいくらかの研究によって思索がなされている[(9)]。この親密性について考えることは今後の課題としたい。

注

(1) バスハウスとは男性と男性が性行為を行うための場所である。日本においてもこれらの施設は存在し、日本では発展場（ハッテン場）などと呼ばれることがある。

(2) 砂川による新宿二丁目と「ゲイメンズバー」のエスノグラフィーにおいて性的なことがらについての記述はほとんど見られない。しかし砂川は性的なことがらを完全に無視していたわけではない。砂川は同著の一章を用いて性的なことがらに着目し、セクシュアリティという概念を再考しようとしてい

る。その章で砂川は、自らの「ゲイメンズバー」のエスノグラフィーにおいて「ゲイメンズバー」での性的なやりとりが観察されたものの、それを自覚的に取り上げなかったことを反省している。

(3) セジウィックの強調点は、「ホモソーシャル」と「ホモセクシュアル」な関係の二分法を指摘することよりも、その二つの関係の連続性を指摘することにあった。しかしセジウィックの研究は逆説的に「ホモソーシャル」と「ホモセクシュアル」な関係の特徴を明らかにしたともいえるだろう。

(4) リアルとは、ゲイたちが用いるフォークタームで、直接会うことを示す。「この前、〇〇さんとリアルした」などの形で使われる。

(5) 「ノンケ」という言葉の語源は明らかではない。しかし「男性を好きになること（そのケ）がない（ノン）」ことが「ノンケ」の語源だという者もいる。ゲイたちは自らをゲイ（時として自らをホモと呼ぶ者もいる）、異性愛者を「ノンケ」という言葉を用いることによって区別することがある。

(6) 現代においてゲイの「出会い」の方法は、主にインターネットを利用した方法へと変化している。その中でも、ゲイたちの間でスマートフォンのアプリケーションが特に人気である。登録者がアプリケーションにログインすると、ログインした位置情報を基に、近くにいる登録者の写真やプロフィールなどが表示される。登録者は、その写真やプロフィールをもとに興味のある相手にメッセージを送ることができる。

(7) 「デビュー」とはゲイたちの使うフォークタームで、「ゲイの世界に第一歩を踏み出すこと」を示す。初めてゲイバーに行く際や、発展場（ハッテン場）に行くことを、ゲイバー「デビュー」や発展場（ハッテン場）「デビュー」と呼ぶことがある。

(8) セジウィックの議論を発展させたものとして、日本の中世から現在における文学作品において表象された男性同士の親密な関係を分析した研究がある（佐伯 2015）。佐伯は男性同士の親密な関係の維持の媒体として稚児の存在と、「女性」の不在または嫌悪があったことを明らかにしている。

(9) これらの研究の一例として、田中（2010）による性的な行為における親密性の探求がある。田中は性的な行為における親密性について「エロス」と「反エロス」という概念を提示し、「エロス」的な関係の特徴として、関係を結ぶ両者の境界が取り払われるような感覚が得られると述べた。この関係も「個人」と「個人」による性的な関係を超越した親密性のように解釈できるだろう。

参照文献

神谷 悠介 2017『ゲイカップルのワークライフバランス 男性同性愛者のパートナー関係・親密性・生活』東京：新曜社。

ギデンズ、アンソニー 1995『親密性の変容―近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム―』松尾精文・松川昭子訳、東京：而立書房。

佐伯 順子 2015『男の絆の比較文化史―桜と少年』東京：岩波書店。

砂川 秀樹 2015『新宿二丁目の文化人類学―ゲイ・コミュニティから都市をまなざす』東京：太郎次郎社エディタス。

セジウィック、イヴ 2001『男同士の絆』上原早苗・亀沢美由紀訳、名古屋：名古屋大学出版会。

田中 雅一 2010『癒しとイヤラシ―エロスの文化人類学』東京：筑摩書房。

フーコー、ミシェル 2001a「生の様式としての友愛について」増田一夫訳、蓮實重彦・渡辺守章監修、小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編『ミシェル・フーコー思考集成 8 1979-1981 政治・友愛』pp.371-378、東京：筑摩書房。

フーコー、ミシェル 2001b「性的快楽の社会的勝利―ミシェル・フーコーとの会話」林修訳、蓮實重彦・渡辺守章監修、小林康夫・石田英敬・松浦寿輝編『ミシェル・フーコー思考集成 9 1982-1983 自己・統治性・快楽』pp.118-126、東京：筑摩書房。

ベルサーニ、レオ・フィリップス、アダム 2012『親密性』檜垣立哉・宮澤由歌訳、京都：拓北出版。

Eguchi, Shinsuke. 2011. Cross-national identity transformation: becoming a gay ‘Asian-American’ man. *Sexuality and culture* 15. pp.27-43.

Ellis, Carolyn. 2004. *The ethnographic I: A methodological novel about autoethnography.* New York: Alta Mira Press.

Ellis, Carolyn; Adams, Tony E; Bochner, Arthur P. 2011. Autoethnography: an overview. *Historical Social Research* 36(4). pp. 273-290.

Weston, Kath. 1997. *Families we choose revised edition*. New York: Columbia University Press.